2009. 9. 16 日本経済新聞（四国版）

かける四国人

出産・介護…一つ屋根の下

大家族の喜び、全国発信

いのちの応援舎理事長　山本　文子氏

8月下旬の昼下がり。高松市のデイサービス施設「ひなた」に、生後3日の赤ちゃんを抱いた山本文子（65）の姿があった。

「まあかわいいね～、ああ男の子なの？」。デイサービスに通うお年寄りが山本に近寄り、声をかける。赤ちゃんに手に触れ、顔を近づけるお年寄りたちに笑みがあふれる。「赤ちゃんに会うことなんてめったにない。元気をもらった」とつぶやく老婦人。山本の傍らで、我が子と老人の交流を見つめる母親の表情に「産んで良かった」という喜びがあふれる。

山本は助産師で特定非営利活動法人（NPO法人）「いのちの応援舎」の理事長。応援舎は「ひなた」と、出産施設の「ぽっこ助産院」、子育て中の親と子どもを支援する「おやこ広場・ひなたぽっこ」などが同居する全国でも珍しい施設。老人と、生まれたばかりの小さな命、幼子と親が触れ合う風景がここでは日常だ。

「ひなたぽっこ」は建物の2階。「ここに来て、もう1人産みたいとも思う」。子ども2人と週1回は訪れる主婦（34）は以前暮らした町で、我が子が周囲の迷惑になっていないか不安に感じ、部屋にこもりがちだった。「お年寄りにはここで、『元気に育っている』『今いたずらしたり、走り回ることが大事』と声をかけてもらえる。子どもも、親以外にも愛されることを実感でき、幸せ」

生まれたばかりの赤ちゃんを抱き、お年寄りと交流する山本理事長（高松市）

かつての日本にあった大家族の雰囲気。その中で命の大切さを実感する。「子と親だけで家の中でこもっていると無意識に虐待、ということもある。子育てがしんどくなったら、『ここに来な』と多くの親に声をかけたい」。こう語る山本は、「いのちの大切さ」を訴え続ける人生だ。

高知県に生まれ看護学校、助産婦学校を卒業後、東京や高知、香川で病院勤務。1986年から主に中高生を対象に、「性を大切にすることはいのちを大切にすること」をテーマに全国で講演活動を始めた。

講演の反響は大きく、依頼は増えた。半面、講演内容を誤解して、いたずら電話や批判の電話も。そんな時、広島で講演を聞いた人からの手紙が届く。「君はいのちの応援団だね」

中絶や虐待、自傷……。命が軽く扱われる状況に山本は心を痛めた。「生き方を変えよう。いのちの応援団になろう」。97年末に病院を早期退職、99年からは自宅マンションを事務所に講演活動や電話相談を始めた。講演は多い年には年間250回にも上った。

2004年のある日、定年退職してホームヘルパー養成講座に通っていた夫が実習の老人施設で見た光景を話した。「まるでマグロを洗うような光景だった」

「いのちは誕生から老後まで豊かで健やかであるはず」。山本夫妻の思いと、山本と同じ思いで働いてきた助産師、看護師仲間と話し合った。「赤ちゃん誕生から豊かな老後まで、集まれる施設を」。願いは山本の講演を聞いた人々に伝わり、1億円以上が集まった。06年2月施設は開き、誕生した命は300人以上を数える。

助産師の仕事で毎月10日は夜勤、寝不足の毎日だが、今も年間100回、北海道から沖縄まで講演に出向く。「生まれる時に立ち会える喜びがあるから続けられる」。山本はいまも、あらゆる世代の命を応援し続けている。

（高松支局長　小林隆）

＝敬称略